

春の月低みを鷹の啼て行

云爾

うくひすの間ちかう鳴や簾こし

ふちめ

斯しても静なものや松かさり

丁知

鶯のあし跡雪に黒みけり

南邨

歩行ても眠気のみぬ春日かな

萬頃

ぬれたまま小舟出しけり朝さくら

八百普

いちかいに紅梅ひらく日より哉

千竹女

万歳かさつとさす日に若かへる

碩布

九十三童

むすひし草の庵はみとり色そふ松にあつ
けて睦月も半過ぬるころ烏白老人を先達
とし木翠の若す、りともなひ紫にはふ筑波
山を見かへりかちに花の波こそとよみけむ
かの桜川をうちわたりはるけき道の鹿鳴
たちする事にはなりぬ

御子郎子の梅なつかしやうすかすみ

春穠鳥穆

甲辰孟春

別餘里快活

相思説吾翁

果憶静軒

盃山静水汲

中

奉送 寺門郎

鳥穆翁西遊

神路やまいかきにはほふうめか香も

君か手向の折にあふらむ

永年

乾坤を栖とし春秋を号とし山水を

もて沈とし月花をもて言葉とする

鳥穆老人を見送りて

その笠に見せてまはるかうめ桜

松 什

見送るやさくら咲中馬の中

大 莫

箱根から先も日よりかあけひはり

廉 布

はやかへり来ませ隅田の花の中

嗟 秀

しはらくととめまうしたいか花の旅

三 升

まぢますそわか廓の花うえるころ

久 喜藤

足も地につかすあれ梅あれ柳

己 千

まりこのとろ、汁十団子もわらひ餅も

喰へぬものは俳諧の骨うまき物は風流

のさひ見るもの中ものに由断あるな

せなどの

木瓜すみれ伊勢は一里も遠くなれ

卓 郎

おもひたつ旅や二見のしほ干潟

木 翠

としころの本意とけていせ参宮のおもひ

しきりによし野初瀬の花もゆかしくかりに